



昼歩くように

「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。」

(ローマの信徒への手紙 13章 12~14節)

上掲の聖句は、ヒッポの司教で西洋古代最大の教父と言われるアウグスティヌス(紀元354~430年)に回心を促した聖句として、あまりにも有名です。

ところで、「夜は更け、日は近づいた」、とは、キリストの再臨が切迫していることを告げる言葉ですが、パウロがローマの信徒への手紙を書いたのが紀元55年頃であったとして、それから数えれば、既に1950年ほど経ち、アウグスティヌスが、この聖句に触れて回心した紀元386年から数えても、もう1620年近くも経っているのです。しかし未だに、キリストの再臨は起こっていません。では、「夜は更け、日は近づいた」、とは、単なる古代人の迷信、パウロやアウグスティヌスの思い込みに過ぎなかったのでしょうか。実は、こんな疑いを抱く者は、私たちが最初ではなく、新約聖書が書かれた時代から既に存在していたのです。そんな者たちに対して語られた言葉が、新約聖書そのものの中に出て来ます。

「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。主の日は盗人のようにやって来ます」(Ⅱペトロ3:8~10)。

私たちは、人間の感覚で2000年を永いと感じ、「なぜ何も起こらないのか」、と、神に文句を言います。しかし、神にとっては、一日は千年のようで、千年は一日のようではないのです。だから、人間の私たちにとっては、永い永い2000年でも、神にとっては、たったの2日でしかないのです。しかも神は、人間に対する無関心や怠慢から、キリストの再臨を遅らせておられるのではなく、一人も滅びないで、皆が悔い改めるようにと、敢えてその日を遅らせ、忍耐をもって、はやる心を抑え、じっと待っておられるのだ、と言うのです。その日が何時か、誰にも分かりません。「天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである」(マタイ24:36)、とされているのですから、それ以上の詮索は、厳に慎まねばなりません。分かっているのは、「主の日は盗人のようにやって来る」、と言うことだけです。盗人が、日時を予告してやって来る、と言うようなことは、お話の世界以外には、まずあり得ません。だからこそ、油断大敵、日頃より注意を怠らぬことが必要なのです。

そこで言われます。「闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう」、と。闇の行いを脱ぎ捨てるだけでは駄目なのです。直ぐに、元に戻ってしまうからです。そのためには、光の武具を身に着けることが重要です。武具とは、戦うための道具です。一体誰と戦うのでしょうか。外でもない、自分と戦うのです。放って置けば直ぐに、悪魔の支配に身を委ね、その手下になって生きようとする、そんな自分と戦うのです。光の武具は、次節ではイエス・キリストと言い換えられています。既に悪魔に勝利された主イエス・キリストのお方に頼む以外、身を守る術がないからです。

洗礼を受けるとは、キリストを着る、と言うことに外なりません(ガラテヤ3:27参照)。キリストは、武具であり、衣装です。最初はチグハグでも、着ている間に、衣装が中味を作ってくださいます。 三輪恭嗣

(2007年 8月26日の礼拝説教より)